

体の痛みと心の痛み

大本山總持寺 知客 河本利太師

ある朝、右足に激痛を感じ目が覚めました。布団からでる際に、毛布が触れるだけで激痛が走ります。当然運転などできないので妻が車を走らせ、揺れるたびにうめき声を上げながらようやく病院に着きました。受付で保険証の確認をするときに、妻から手渡されたものを出すと、それは妻の保険証で私ではありません。「これは私ではない」と冷たくあしらい、私のものを早く探すよう促しました。痛さと受付で待たされたこともあり、いらいらしながら診察を待ちました。

激痛の原因は痛風の発作でした。「受付であの態度はひどいじゃないの。本気で心配していたのに。」と帰りの車中で、妻が泣き出しました。結婚間もない私は初めて妻の涙を目の当たりにしたのです。その涙は何よりも強烈に私の心に刺さりました。痛みに我を忘れて、本気で私のことを心配して、出来ることを行ってくれていた妻にひどい態度で接してしまい、その心を深く傷付けてしまったのです。

痛みで苦しんでいる私のため、一時でも早く先生に診てもらいたい、と私を一心に思う気持ちで行ったことに、正しいとか間違いとかはなく、その行いは菩薩行なのでした。

永平寺を開かれた道元禅師は「正法眼蔵」の中で「人間の如来は人間に同ぜるがごとし」とお示しです。今を生きている私たちが菩薩としての行いに生きるあいだに仏性が現れる、ということです。

悪気はなくても何気ない一言や、所作が相手の心を深く傷つけてしまうことがあります。私は痛風の一件があってから、これからは決して、妻を泣かすようなことはしない、と心に決めて結婚生活二十年を迎えようとしています。

今夜の晩御飯に自分が食べたいものがあったとしても、まず妻が何を作るのか様子をうかがうことにしています。家族のことを思って作ってくれる食事が、時に私の口に合わないことがあっても、そのことを伝えたりしたり、残したりしません。なぜなら尿酸値が上がらないような献立を作ってくれていることを私は知っているからなのです。